

『マントのリームル』における、アーサー王と臣下の騎士達との関係をめぐって

An Essay on the Relationship between King Arthur and His Knights Depicted in *Skikkjurímur*

林 邦 彦

要 旨

13世紀のノルウェーでフランス語原典からノルウェー語に翻案された後、さらにそれがアイスランド語に翻案されたと考えられている、アーサー王伝説を扱ったサガ作品群のうち、身に着ける女性の不貞に応じて極端に伸び縮みするマントを扱った『マントのサガ』(*Möttuls saga*)と呼ばれる作品は、フランス語作品『短いマントの短詩』(*Le Lai du Cort Mantel*)がノルウェー語への翻案を経てアイスランド語に翻案されたものと考えられているが、この『マントのサガ』を基にして、恐らくは15世紀にアイスランドで成立したと考えられている『マントのリームル』(*Skikkjurímur*)と呼ばれる物語詩は、基本的な物語内容は『マントのサガ』を踏襲しているが、『マントのサガ』と比較すると、作品中、次々と不貞が明らかとなる女性やその相手と思しき男性に対するアーサー王の態度、およびアーサー王と臣下の騎士達との関係の描き方に大きな変化が施されていることがわかる。

キーワード

アーサー王物語、騎士のサガ、*Möttuls saga*、リームル、*Skikkjurímur*

1. はじめに

ノルウェー王ハーコン4世(Hákon Hákonarson, 在位1217-1263年)のもとでは、いくつものフランス語の文学作品がノルウェー語へと翻案された。

その中に『短いマントの短詩』(*Le Lai du Cort Mantel*) と呼ばれる作品がある。ノルウェー語への翻案の後、そのノルウェー語版がさらにアイスランド語へと翻案され、『マントのサガ』(*Möttuls saga*) と呼ばれる作品となって、1300年以降のものとする複数のアイスランド語の写本によって伝承されている(当初のノルウェー語翻案の写本は現存しない¹⁾)。

『マントのサガ』については、原典とされるフランス語の『短いマントの短詩』と比べ、頭韻などの独自の文体的な特徴が見られる点や、主として登場人物の行動の動機をよりはっきりさせるために、細かな記述の付加が施されているといった点が、先行研究で指摘されているが²⁾、その物語は、基本的には『短いマントの短詩』の物語を踏襲したものであり、これら2点の作品の梗概は以下のとおりである。アーサー王³⁾の宮廷で聖霊降臨祭の祝宴が行われ、男女を問わず大勢の高貴な身分の者達が宮廷に集まる。食事の用意ができるが、アーサー王は何らかの冒険をめぐる知らせを耳にしない限り食卓に着かないのが習慣で、食事が取られない状態が続く。そこへある若者が馬に乗ってやって来て、アーサー王に面会を求める。若者はある魔法のマントを携えており、このマントは貞操に問題がない女性にはぴったり合うが、貞操に問題がある女性が着用すると、その問題のありように応じてマントが変形し、体の大きさに合わなくなるという性質のものだという。すぐに宮廷内にいた女性達がすべて集められ、アーサー王妃から順番に試着を始めるが、アーサー王妃を含め、誰一人としてマントの合う女性は見つからない。その場にいた女性全員が試着を終えた段階で、アーサー王は、宮廷内にまだ残っている女性がいなか確認させると、一人の乙女が見つかる。彼女が試着をすると、マントはぴったりと合い、周囲の称賛を浴びる。マントは彼女に与えられ、このマントを宮廷へ持参した若者は立ち去る。その後、食事が行われ、マントの合った女性は恋人とともに宮廷を去り、マントはある修道院に預けられる。以上が『短いマン

『マントのリームル』における、アーサー王と臣下の騎士達との関係をめぐって
トの短詩』および『マントのサガ』の梗概である。

しかし、この『マントのサガ』はその後、アイスランドにおいて、「リームル」(rímur)と呼ばれるアイスランド独自の形式の物語詩へと翻案されている。『マントのリームル』(Skikkjurímur)と呼ばれている作品で、本稿で中心的に扱うのはこの『マントのリームル』の方である⁴⁾。

この作品は、恐らくは15世紀にアイスランドで著されたものと考えられており、本作を伝える写本としては、Wolfenbüttel, Codex Guelferbytanus 42.7 Augusteus 4to (1470-80年), Reykjavik, AM Acc. 22 (1695年?), Stockholm, Papp. 4to nr15 (17世紀)の3点が現存している。

この『マントのリームル』と呼ばれる作品の内容は、大筋では『マントのサガ』の物語と共通するものであるが、いくつかの点で独自の改変が加えられている。

本稿では、『マントのリームル』を『マントのサガ』と比較した際に見られる相違について、既に先行研究で指摘されている点のうち、いくつかについてさらに考察しなおし、『マントのリームル』の特徴として新たな点を浮かび上がらせ、そうした特徴をアイスランド語圏における関連作品の中に位置付けることを目指したい。

2. 『マントのリームル』

先述のように、『マントのリームル』は恐らくは15世紀にアイスランドで著されたものと考えられているが、「リームル」(rímur)とは ríma という語の複数形で、この作品自体は3つの ríma と呼ばれる部分から構成されている。各 ríma は複数のスタンザからなり、1スタンザの行数はいずれも4行である。第Ⅰ ríma は60スタンザ、第Ⅱ ríma は44スタンザ、第Ⅲ ríma は85スタンザから構成されている⁵⁾。

2.1. 『マントのルームル』に見られる『マントのサガ』との相違をめぐ る先行研究での指摘

『マントのルームル』の物語に見られる『マントのサガ』との相違点については、Andrés Björnsson (1947)⁶⁾、Marianne E. Kalinke (1981)⁷⁾、Marianne E. Kalinke (1987)⁸⁾、Matthew James Driscoll (1991)⁹⁾、Carolynne Larrington (2011)¹⁰⁾らが様々な点を取り上げており、これら先行研究で指摘された点は以下のようにまとめられる：

①『マントのルームル』では、第Ⅰ、第Ⅱ、第Ⅲのいずれの ríma においても、各 ríma の冒頭部分で、物語から離れたところでの作者によるコメントが記されている（この作者のコメントは、第Ⅰ ríma では8スタンザ、第Ⅱ ríma では5スタンザ、第Ⅲ ríma では9スタンザに及ぶ）。こうした、ルームル作品を構成する各 ríma の冒頭部分において、物語から離れたところでの作者のコメントが記されるのは、ルームルというジャンルには通例であるが、この『マントのルームル』では第Ⅰ、第Ⅱ、第Ⅲのいずれの ríma の冒頭においても、作者は物語から離れたところでのコメントとして、恋愛に際しての女性の態度への不満や非難を展開している（Andrés Björnsson 1947: 182-4; Kalinke 1981: 216; Kalinke 1987: LXXVII-LXXX; Driscoll 1991: 112-3; Larrington 2011: 90-1）。

②『マントのルームル』では、第Ⅰ ríma の第9スタンザ以降に、ヴァルヴェン (Valven。英語圏作品のガウェイン (Gawain) にあたる) がアーサー王の甥であることや、イーヴェント (Ivent) が王に愛された偉大な騎士であること、エーレック (Errek) が愛らしい婦人を連れて帰って来ることや、キャイイ (Kæi) の役割が毒舌家の執事であることなど、『マントのサガ』以外のアーサー王伝説を扱った複数のサガ作品から得られたと思

『マントのルーム』における、アーサー王と臣下の騎士達との関係をめぐって
われる情報が見受けられ、いわゆる「円卓」に由来すると思しき小道具
への言及も見られる (Andrés Björnsson 1947: 172; Kalinke 1981: 217; Kalinke
1987: LXXV III ; Larrington 2011: 90)。これらの要素は『マントのサガ』には
見られない。

③上記の②とも関連するが、『マントのサガ』では、アーサー王の宮廷で
の祝宴に訪れる具体的な客を個別に紹介する記述はないが、『マントのリ
ームル』ではこうした記述が存在し、その具体的な客の名は、『エレクス
のサガ』における主人公の騎士エレクスとエヴィダの婚礼の宴に訪れる
数多くの列席者の中から借用されている (Andrés Björnsson 1947: 172-3;
Kalinke 1981: 217; Kalinke 1987: LXXVIII-IV; Driscoll 1991: 115-6; Larrington 2011:
90)。また、女性達が次々とマントを試着する場面の記述についても、『マ
ントのサガ』では試着をする女性として具体的な名前が挙がっているの
はアーサー王宮廷の騎士の恋人ないしは妻だけであるが、ルームルでは
試着をする具体的な女性の名前の中に、客として祝宴を訪れている他国
の君主達の夫人の名も登場する (Kalinke 1981: 218; Kalinke 1987: LXXX;
Driscoll 1991: 116-7; Larrington 2011: 90, 92)。

④マントの製作に関わる状況として、『マントのサガ』では1人の妖精の
女性が信じられないほどの偉大な技で作ったとしか記されておらず、製
作に要した期間については言及がないが、『マントのルームル』では、ど
のような技が用いられたかは記されていないものの、3人の妖精の女性
達が15年以上かけて作成したとある。これは、身に付ける女性の不貞に
応じて伸び縮みするマントをモチーフとして含む形でアイスランドで独
自に著された『美丈夫サムソンのサガ (*Samsons saga fagra*)』と呼ばれる
作品の中で、4人の妖精の女性達が18年かけて、夜も眠らず地下の住居

で問題の魔法のマントを編み続けたというエピソードに触発されたものではないか (Kalinke 1981: 218; Kalinke 1987: LXXIX)。

⑤マントの試着の結果、次々と女性達の不貞が明らかとなるのは『マントのサガ』、『マントのルーム』いずれにも共通であり、『マントのサガ』ではそれを受け、当該の女性やその夫（または恋人の男性）、およびアーサー王自身や、試着が失敗するごとに嘲り文句を発するキャイイらによる反応の応酬が繰り返されるが、こうしたやり取りはルームでは簡略化されたり削られているものが多い (Driscoll 1991: 117-23)。

⑥『マントのルーム』では、女性達がマントを試着した結果をあらわす記述において、婉曲にはあるが、性器に言及した表現と解釈できる例がいくつか見受けられる。まず、アーサー王妃が試着したところ、前部はマントが床につくまでの長さに伸びたものの（Ⅲ、第11スタンザ3-4行、343頁）、「しかし、背中側は、誰かがそこに狐を入れたかのように、大層短くなった (Enn á bak var stutt um stef, / sem stungit hefði einhverref.)」ことが記されるが（Ⅲ、第12スタンザ1-2行、343頁）、「狐 (ref)¹¹⁾」というのは暗に男性器を指すものと考えられる¹²⁾ (Larrington 2011: 91)。さらには、試着をした女性の陰部の位置にマントが掛からない形になった様子を記したものと解釈できる箇所が、複数見受けられる (Driscoll 1991: 114-5; Larrington 2011: 91)。これらの箇所ではいずれも、女性の陰部を指すと思しき記述は、「女陰」を意味するとされるケニングを用いてあらわされたものであるが、まず、アーサー王宮廷の騎士カルドン (Kardon) の恋人の試着の折には、Kappinn sá, sem Kardon hét / kærú sína skryðaz lét; / aumliga fór hún auðar rein, / ekki huldi klettis bein. 「カルドンという名の勇士は彼の恋人に (マントを) 羽織らせた。それは彼女には惨めな形でし

『マントのルーム』における、アーサー王と臣下の騎士達との関係をめぐってか合わず、陰部¹³⁾を覆う形にはならなかった」(Ⅲ, 第42スタンザ, 347頁)と記される。そして、夫婦そろって聖霊降臨祭の祝宴の客としてアーサー王宮廷を訪れていたフィエリフス老王 (Félix kóngr inn gamli) の妃が試着をした折のこと、作者が思うに、彼女は恐らく200歳にはなっていたであろうとのことであるが(Ⅲ, 第43スタンザ, 347頁)、このフィエリフス老王の妃が試着をすると、*Á jörðu stóð hún alt í kring, / aldri sá þeir vænna þing, / en þó var gat firi gásar stað, / gat hún ekki fólgit það.* 「それ(マント)は全面が床につき、彼らはこれ以上美しいものは見たことがなかった。しかし、「ガチョウの場所¹⁴⁾」には穴ができ、彼女はそれを隠すことができなかった」(Ⅲ, 第44スタンザ, 347頁)と記される (Driscoll 1991: 114-5; Larrington 2011: 91)。婉曲な表現を用いたものとは言え、男性器、女性器を問わず、このような、性器に言及したと思しき表現は『マントのサガ』には見られない¹⁵⁾。

⑦『マントのルーム』では、最後にマントが合う女性が見つかった後、アーサー王は、不貞が明らかとなった女性達全員の宮廷からの追放を宣言し、臣下の騎士達に対し、「戦いに励み、もっと良い女性達を探すべきだ」と語り、騎士達は冒険を探しに出かけてゆく (Kalinke 1981: 219; Driscoll 1991: 123-4; Larrington 2011: 92)。上の⑥に記した点とも関連するが、『マントのルーム』の作者は女性に嫌悪感を抱いており、騎士の冒険や戦績に関心が向けられている (Kalinke 1981: 219; Larrington 2011: 92)。

これらが、『マントのルーム』の内容を『マントのサガ』と比較した際に見られる相違点として、先行研究で指摘されている点であるが、これら先行研究で指摘された箇所いくつかについてさらに考察しなすと、『マントのルーム』に見られる『マントのサガ』との相違点として、先行研究

では指摘されていない新たな特徴が浮かび上がってくる。それは、『マントのルームル』では、『マントのサガ』との間で相違が見られるいくつかの箇所において、アーサー王とその臣下の騎士達との間が良好な関係にある様が描かれ、作品全体を通して、その良好な関係が強調される形になっているという点である。

2.2. 『マントのルームル』において強調されているアーサー王と臣下の良好な関係

『マントのルームル』の中で、『マントのサガ』との相違が見られる点として、先行研究で指摘された諸々の箇所について考察しなおした結果、『マントのルームル』において、『マントのサガ』には見られない形で、アーサー王とその臣下の騎士達の間が良好な関係を作り、その良好な関係の強調に寄与する記述になっていると判断できたのは以下の2点である：

① 『マントのルームル』では、アーサー王およびその宮廷の榮譽、および宮廷の主だった騎士達の武勇や騎士としての積極的な姿勢が強調して描かれるとともに、騎士達がみなアーサー王を慕っている様子がはっきりと記されている。

② 『マントのルームル』では、宮廷に持ち込まれた魔法のマントの試着によって女性達の不倫関係が発覚した後、不倫に関わった女性達はアーサー王から厳しい処分を受けるが、一方の男性側（アーサー王の臣下の騎士も一定数含むと思われる）は過ちを見逃され、騎士達（不倫に関わった者も含むと思われる）はみな、アーサー王への忠誠心を新たにす。

そこで、以下、本稿ではここで挙げた2点について、該当する『マントの

『マントのリームル』における、アーサー王と臣下の騎士達との関係をめぐって

サガ』との具体的な相違箇所を見ながら考察を進めてゆきたい。

2.2.1. 強調される騎士達の武勇と、彼らがアーサー王を慕う様をめぐって
まず、サガ（以下、特に断りなく「サガ」と記す際には『マントのサガ』を指す）では作品の冒頭で地の文における比較的長いアーサー王賛辞があり、その後、聖霊降臨祭の祝宴へと話は移ってゆくが、サガでは王妃の美しさや、彼女が大勢の高貴な身分の乙女達の来訪に喜んだこと、王妃が乙女達を自分の部屋に入れ、彼女らに好意から、これ以上のものはないほどの高級な衣服や装身具などを分け与えたことが記され、アーサー王も同様に、宮廷を訪れた騎士達に高級な衣服や頑丈な武器、スペインなどから送られた馬を分け与えたことが記されるなど、宮廷で王や王妃によって分け与えられた品々の高価さや王夫妻の気前の良さばかりが強調されていると言ってよい（9・11・13頁）¹⁶⁾。続いて、聖霊降臨祭の前の土曜には、宮廷にこの世で類例がないほど大勢の人々が集まり、その場に集った多くの嗜みある男達によってあらゆる類の楽しみ事が行われ、彼らは晩になると宿に向かい、盾持ちの小姓達が準備した寝床で眠りに就いたことが記される（13・15頁）。

一方、リームル（上記の「サガ」のケースと同様、以下、特に断りなく「リームル」と記す際には『マントのリームル』を指す）では、サガの冒頭に見られた長いアーサー王賛辞は簡略化されているが、先にも記したように、第 I rima の冒頭で、恋愛に際しての女性の態度を非難する作者のコメント（I, 第 1-8 スタンザ, 327-8 頁）¹⁷⁾ が記された後、この世にアーサー王に匹敵すると思われる者はいなかったことや、王の豪胆さ、さらには王が金^{きん}でもって多くの貧しい者達を喜ばせたことが記され（I, 第 9-10 スタンザ, 328 頁）、次の第 11 スタンザでは、そのような崇敬さるべき王を戴き、武勇に秀でた騎士達を擁するアーサー王の宮廷自体に対する賛辞が述べられる。するとその後、第 12 スタンザから第 17 スタンザにかけて、以下のように、アーサー王宮廷に属する主だった騎士達とその武勇の様とともに個別に紹介される。

これはサガには見られない（もっともキャイイに関しては武勇の様は記されず、その心が嘲りに彩られていたことが述べられるのであるが）：

(1) Valven hét hans systurson, / sá var riddarinn mesti, / engi fanz á Óðins kvón¹⁸⁾ / jafn við hann á hesti. 彼（アーサー王）の甥はヴァルヴェンといい、最高級の騎士であった。この世で馬に跨れば、彼に匹敵する者は誰も見つからなかった。（I, 第12スタンザ, 328頁¹⁹⁾）

Ivent var honum annar kæstr / afreksmaðrinn sterki, / honum var hjálmr at höfði læstr / ok hafði gulligt merki. イーヴェントは彼（アーサー王）にとって、その次に親愛なる人物で、剛力の勇士であった。彼は頭にしっかりと兜を載せ、金の折り込まれた旗を携えていた。（I, 第13スタンザ, 328頁）

Errek þótti jafn við þeim / øðlings vinr enn fríði, / þessi flutti fegrsta heim / fallda Rist²⁰⁾ úr stríði. エーレックは彼らと同等の者と思われ、王の見栄え善き友人であった。この者は戦地から、ことのほか美しい婦人を連れて帰って来た。（I, 第14スタンザ, 328頁）

Þessir vóru i siklings sal / sóma skráddir mestum, / þá var enn prúði Parcival / prýddur vópnum beztum. この者達は王宮にあって並ぶものなき名誉に輝いており、勇猛の士バルスイヴァルも最高級の武器を身に纏っていた。（I, 第15スタンザ, 329頁）

Estor hét ok Idús þeir, / sem ávalt frömu dáðir, / þessir fara með fránan geir / ok fylgdu kóngi báðir. 常に偉業を成し遂げていた者達は、エスト

『マントのリームル』における、アーサー王と臣下の騎士達との関係をめぐって
ルとイードゥースといった。この者達は光り輝く槍を手にし、ともに
王に同行していた。(I, 第16スタンザ, 329頁)

Ræðismaðurinn Kæi var kendr, / kóngi þenti at borði, / hæðnar berr
hann hyggju strendr, / hælinn næsta i orði. 執事はキャイイという名で、
卓で王に給仕をしていたが、その心は嘲りに彩られ、自慢ばかりして
いた。(I, 第17スタンザ, 329頁)

このように、毒舌家のキャイイは別として、アーサー王宮廷の主だった騎
士達の武勇の様が個別に紹介されているが、その中でもイーヴェントとエ
ーレックについては、それぞれ「イーヴェントは彼(アーサー王)にとって、
その次に親愛なる人物で (Ivent var honum annar kæstr)」, 「王の見映え善き友
人 (qðlings vinr enn fríði)」と紹介され、傑出した騎士である彼らがアーサー
王にとって大切な存在であったことが記されている。

そして第18スタンザでは、

(2)Engi vildi qðlings maðr / qðrum minni heita, / elligar fekkz þeim ekki
staðr / innan borgar reita. 王の臣下の騎士達は誰一人、他者に劣ろうと
は思わず、そうでなければ城市内に彼らの居場所は与えられなかった。
(I, 第18スタンザ, 329頁)

と、宮廷の騎士達が常に互いに相手に負けまいと騎士道に切磋琢磨してい
た様が記されると、第19-21スタンザでは王が座っていた椅子が円形をして
いた理由と、それがもたらす利点が記される。これはいわゆる「円卓」に
由来するものと考えられるが、以下の引用のように、卓ではなく、sess (英:
seat) と記されている。ここではこの椅子について地の文で、

(3) At þeim þótti ilt til orðs, / ef einn sat næstur stilli. もし誰か一人が（他の者達よりも）より（王の）近くに座っていたら、彼らにとって不満に思われた。（I, 第19スタンザ, 329頁）

Því var kringlótt kóngsins sess / komit á miðju gólfi, / allir áttu jafnt til þess / upp ok niðr frá hvólfi. そのために王の椅子は円い形をしており、床の真ん中に位置し、すべての者達はその椅子まで等距離にあり、丸天井から（測って）も同様であった。（I, 第20スタンザ, 329頁）

Sneriz þat æ sem sólin gekk, それ（椅子）は太陽のように常に回転し（I, 第21スタンザ, 1行, 329頁）

と、円形をした椅子の由来や構造、様態が記されるが、ここでは、「もし誰か一人が（他の者達よりも）より（王の）近くに座っていたら、彼らにとって不満に思われた」と、臣下の騎士達の誰もが王を敬愛している様が記されている。その上で、王の椅子がそのような円い椅子で、しかもそれが場の中央にあったおかげで、

(4) Horfði hann líkt á hvern sinn rekk, / hólða gleðr hann snjalla. 王は勇士達の誰（の顔）をも均等に見ることができ、それは有能な者達を喜ばせた。（I, 第21スタンザ, 3-4行, 329頁）

と、この椅子の形状やそれが置かれた位置がもたらす利点が示されるが、それはアーサー王と臣下の騎士達との間に良好な関係を築くのに寄与するものである。

サガにはこのような円形の椅子の由来と利点はおろか、そもそも円形の

『マントのリームル』における、アーサー王と臣下の騎士達との関係をめぐって

椅子への言及すらない。

そして第22スタンザでは、王が臣下それぞれのカップを均等に満たす場面があり、臣下達に関しては、

(5) hverjum þótti hallmælt sér, / ef heyrði lesit um annan. 誰もがもし他者をめぐる噂話を耳にしたら、自分が非難されたように感じた。(I, 第22スタンザ, 3-4行, 330頁)

と、アーサー王宮廷の騎士達が自分自身の名誉のみならず、同宮廷の他の騎士の名誉にも敏感であった様が記されている。宮廷に属する騎士達の連帯感や、アーサー王宮廷の騎士としての自覚の強さが感じられるが、この記述もサガにはない。もちろん、こうしたアーサー王宮廷の騎士達の連帯感やアーサー王宮廷の騎士としての自覚の強さは、主君たるアーサー王にとっては喜ばしいものと考えられ、この引用(5)の記述からも、改めてアーサー王と臣下の騎士達の関係の良好な様が窺える。

このように、リームルではアーサー王宮廷の騎士達が武勇に秀でていた様や、騎士としての積極性、名誉に敏感な様、騎士達の連帯感、アーサー王宮廷の騎士としての自覚の強さ、そしてアーサー王を敬愛していた様子が立て続けに記され、それと同時にアーサー王にとっては、このような傑出した騎士達が「親愛なる」、「友人」といった大切な存在であったことが繰り返し記され、強調されていることがわかる。こうした点は、アーサー王およびその臣下達の騎士としての名声につながると同時に、アーサー王と臣下達の間には良好な関係を作り上げ、また、その良好な関係を作品の受容者に強く印象付けるものでもある。これらはすべてサガには見られない記述である。

この後、リームルでも聖霊降臨祭の祝宴の描写となり、そこへマントを

持った（とはまだこの段階では記されていないが）若者が馬でアーサー王の宮廷に到着し、王との面会を求め、マントの性質についての説明を行うと、王妃をはじめとする女性達が呼んで来られ、試着が始まる。王妃を含む誰一人としてマントが合う女性はおらず、最後に一人、宮廷内にまだ残っていた女性が見つかり、彼女が試着をすると、マントはぴったりと合い、彼女は称賛を受け、マントは彼女のものとなる。

祝宴が始まってから、マントを持った若者が宮廷を訪れ、試着が始まり、最後にマントがぴったり合う女性が見つかるまでの経緯については、先に、先行研究で指摘されている点として記したうちの③、⑤、⑥の点が、サガとリームルの間の目立った相違点で、大筋では、両作品に描かれた事の成り行きは共通している。

問題はリームルにおいて、最後にマントの合う女性が見つかった後に記される、このたびの一連の試着結果を受けてのアーサー王の対応である。

2.2.2. 不倫関係発覚後の女性の冷遇と相手側の男性の免責をめぐって

これは先述のように先行研究でも指摘されている点であるが、サガでは女性達がマントを試着した結果、一人を除き、その場にいたすべての女性達の不貞が明らかになると、

(6) enn konungr settiz þa til bordz ok öll hird hans ok máa þat med sónnu seggja ath þar sát margr godr Riddari angradr saker sinnar vnnasto. Enn Artus konungr lett veita hird sinni med suo myklum kostnadi ath huergi hefer verith ónnur þuilik veizla veit ne þegin. アーサー王は騎士達ともども食卓に着いた。実際のところ、多くの立派な騎士達は恋人達のことで悲しんでいたが、アーサー王は宮廷人達に対し、大金を叩いて類例のないほどの宴を催した。(67・69頁)²¹⁾

『マントのルーム』における、アーサー王と臣下の騎士達との関係をめぐってとあり、みなが満腹になると、唯一マントが合った女性の恋人であるカラディーン (Karadín) は王に暇を請い、喜びのうちに恋人と一緒に宮廷を発つ。

一方、ルームでは、一人を除き、その場にいたすべての女性達の不貞が明らかになると、

(7) Fylkir talar við fljóðin ǫll: / „fari þér burt úr minni hǫll, / lotning fáir þér litla hér, / þér lifið við skǫmm sem makligt er “. 王はすべての女性達に言った、「直ちに私の宮廷から出てゆくのだ。そなたらはここでは碌に名誉に輝くことはない。恥にまみれて生きるのだ。それがそなたらにはふさわしいのだ。」(Ⅲ, 第76スタンザ, 352頁)

Kóngurinn talar við kappu sína: / „kunnig sé yður ætlan mín, / þér munuð vekja vigra skúr, / því vér skulum sækja oss betri frúr “. 王は彼の勇者達に言った、「そなたらに私の計画を知らせる。そなたらは休むことなく戦に励むのだ。我々はもっと立派な婦人方を探すべきだからだ。」(Ⅲ, 第77スタンザ, 352頁)

Ýtar sóru á oðlings náð / alla sína breytni ok ráð; / riddara sögurnar rísa af því, / at rekkrar kómu þrautir í. 臣下達は自分達の行動や決断すべてにおいて王の意に沿うことを誓った。そこから騎士の物語 (サガ) が生まれるのであり、騎士達は大変な辛苦に身を投じるのである。(Ⅲ, 第78スタンザ, 352頁)

Síðan endaz veislan væn, / virðar þágu af kóngi lén; / ǫðling sinnar æru naut, / allir fóru með gjöfum á braut. やがてこの豪華な祝宴は終わり、

臣下の者達は王から報酬をもらった。王は名声に浴し、みなが贈り物
をもらって帰った。(Ⅲ, 第79スタンザ, 352頁)

という経過をたどる。ここでもサガの該当場面では触れられていない武勇
が前面に出され、さらに臣下の騎士達は王に追従の意志を示し、ここでも
アーサー王と臣下の騎士達との間の良好な関係を印象付ける形となっている。
それは、王に対する敬愛の念や臣下達の忠誠心に基づくものである。

しかし、ここではこの、リームルにおいてアーサー王が、不貞が明らか
になった女性達をみな追放する、という要素が持つもう一つの別の側面
について考えてみたい。それは、リームルでは不倫関係の発覚後、不倫に関
わった女性達はアーサー王から厳しい処分を受けながら、一方の男性(ア
ーサー王宮廷の騎士も含むと思われる)側については、過ちを見逃されてまで、
王との良好な関係が強調されているという点である。

と言うのも、リームルではサガとは異なり、不倫という行為に対し、王
が断固たる措置を講じるが、不倫という行為は当然男性と女性がいてこそ
成立する行為である。また、アーサー王宮廷の女性が不倫に関わっていた
のであれば、その相手の男性がアーサー王宮廷の騎士である可能性は十分
にあらう。しかし、リームルではあくまで先の引用のように、アーサー王
が追放したのは女性達だけで、男性の追放者がいたとの記述や、不貞が明
らかになった女性達の個々の不倫相手の男性を突き止めようとの動きがあ
ったという記述はない。したがって、不倫相手の男性側が何らかの処分を
受けたとの記述もない。一方、女性に関して言えば、アーサー王は不貞が
明らかとなった女性達をみな追放したとあるが、最初にマントを試着し、
不貞が明らかとなったのはアーサー王妃であるから、不貞が明らかとな
った女性達をみな追放したのであれば、王は自らの妃までこの場で追放した
ことになる。たとえアーサー王宮廷の騎士達が不倫に関わっていたとして

『マントのリームル』における、アーサー王と臣下の騎士達との関係をめぐって

も、彼らには何の落ち度もなく、一方的に女性から被害に遭わされたのであり、悪いのは女性達だとも言わんばかりである。

本作ではサガと比べ、アーサー王宮廷の騎士達の武勇や騎士としての姿勢が称賛され、そうした騎士達と彼らの主君たるアーサー王との良好な関係が強調されていることは先に述べたとおりであるが、この両者の間の良好な関係は、ただ臣下の騎士達の武勇や騎士としての姿勢、および彼らが日常的にアーサー王を敬愛している様を描くことで表されているだけでなく、いわゆる男女関係においても、不倫の発覚後、女性は格段に冷遇されている一方で、男性（アーサー王宮廷の騎士も含むと思われる）は不倫に関わっていたとしても不問に付されるという形で、同様に騎士達と主君たるアーサー王との良好な関係が前面に出されていることがわかる。

2.3. 結 語

本稿ではここまで、『マントのリームル』を『マントのサガ』と比較した際に見られる特徴について考察してきた結果、リームルでは騎士の武勇や名誉、騎士達のアーサー王に対する忠誠心に基づく両者の間の良好な関係が強調されており、不倫関係の発覚後は不倫に関わった女性側だけが厳しい処分を受け、関わった可能性のある男性（アーサー王宮廷の騎士も含むと思われる）については免責される形で、ここでも王と騎士達との良好な関係が前面に出されていることが明らかとなった。

登場人物の騎士達が、フランス語原典と比べ、自分達の名誉を意識する度合いが強い点や、主君が臣下の騎士の不倫に寛容になる点については、騎士物語を扱った他のサガ作品の中で、類似した面を持つ作品も見受けられる。まず、フランス語原典と比べ、騎士達が自分達の名誉を意識する度合いが強いという点について言えば、例えばクレチアン・ド・トロワ (Chrétien de Troyes) の『エルクとエニッド (*Erec et Enide*)』や『イヴァン

『Yvain』が、それぞれノルウェー語への翻案を経てアイスランド語へと翻案されたものと考えられている。『エレクスのサガ (*Erex saga*)』、および『イーヴェンのサガ (*Ívens saga*)』と呼ばれる作品については、それぞれの作品の主人公の騎士エレクス (Erex) およびイーヴェン (Íven) が、クレチアン作品の主人公エルク (Erec) やイヴァン (Yvain) と比べ、より自分の騎士としての名誉を意識する度合いが強い点が、Marianne E. Kalinke (1973²²); 1975²³); 1977²⁴): 142-3) や Bernd Kretschmer (1982²⁵); 172-7) などによって指摘されている。一方、主君である王が、自らの妃と臣下の不倫に目を瞑ってまで臣下との関係を良好に保つ、ないしは臣下との間に波風を立てないようにするという点については、いわゆるトリスタン伝説を題材としてアイスランドで独自に著された『トリストラムとイーソッドのサガ (*Saga af Tristram ok Ísodd*)』と呼ばれる作品に、その例が認められる²⁶)。しかし、不倫関係発覚後、本作のように、女性の側だけが一方的に厳しい処分を下されるなどの形で冷遇されるケースは珍しい。

アイスランド独自の物語詩リームルには、アイスランドのサガ作品の中でも、特に、「騎士のサガ (*riddarasögur*)²⁷」と呼ばれるジャンルのサガや、「古代のサガ (*forndarsögur*)²⁸」と呼ばれるジャンルのものを原典とした作品が多いが、こうしたリームルの物語は、各々の原典のサガ作品の内容に忠実であるのが通例であり、仮に『マントのリームル』が『マントのサガ』をリームルに翻案したものであるとしたら、このように、原典に大幅な内容上の改変が加えられたリームル作品は異例である。

サガ作品のうち、トリスタン伝説を扱ったものであれば、『トリストラムとイーセンドのサガ (*Tristrams saga ok Ísondar*)』と呼ばれる作品は、ブリテンのトマ (Thomas of Britain) によるフランス語の作品が、13世紀にノルウェー王ホーコン4世の命でノルウェー語に翻案された後、そのノルウェー語版がさらにアイスランド語へと翻案され、現在、アイスランド語の写本

『マントのリームル』における、アーサー王と臣下の騎士達との関係をめぐって
によって伝承されている作品で（当初のノルウェー語翻案を伝える写本は現存
しない）、古典的なトリスタン物語の内容を踏襲したものであるのに対し、
上記の『トリストラムとイーソッドのサガ』と呼ばれる作品は、恐らくは
14世紀ないし1400年頃にアイスランドで著されたものと考えられており、
『トリストラムとイーセンドのサガ』と比べると、人物やプロットの非常に
基本的な内容こそ合致しているものの、分量は大幅に少なく、その内容は
様々な点で大幅に異なっている。

『マントのリームル』についても、フランス語の『短いマントの短詩』の
内容を比較的忠実に伝える『マントのサガ』から直接リームルへと翻案さ
れたのではなく、『トリストラムとイーソッドのサガ』のように、『短いマ
ントの短詩』がノルウェー語への翻案を経てアイスランド語へと翻案され、
『マントのサガ』と呼ばれる作品となった後、この『マントのサガ』の内容
に大幅に改変を加えた新たなサガ作品が著されたものの、その新たなサガ
作品を伝える写本は現存せず、その現存しない改変版のサガ作品が『マン
トのリームル』の原典になったという可能性もあるのではないだろうか。

付 記

本稿は、日本ケルト学会第36回研究大会（於 慶応義塾大学日吉キャンパス、
2017年10月21日）における発表原稿に加筆修正を施したものである。貴重なご
意見をくださった方々に感謝申し上げたい。

註

- 1) 『マントのサガ』を伝える写本は全部で18点現存し、いずれもアイスランド
語によるものである。この作品を伝える写本群は2つのグループに大きく分
けられ、1つは1300年頃のものとしてされるアイスランド語写本の一葉のみの断
片 AM598 I β 4to によって代表されるグループで、もう1つは、1400年頃
のものとしてされ、クレチアン・ド・トロワのフランス語作品『イヴァン』(Yvain)
がノルウェー語翻案を経てアイスランド語に翻案されたものとされる作品『イ

ーヴェンのサガ』 (*Ívens saga*) も含む Stockholm, Perg. 4:o nr 6 (ただし、『マントのサガ』を伝える部分は二葉しか遺されていない) や、1400年頃のものとして、もともとは Stockholm, Perg. 4:o nr 6 の一葉だったとされる断片 AM598 I a 4to (一葉のみ)、および Stockholm, Perg. 4:o nr 6 における本作を伝える部分がまだ無傷であった頃に Stockholm, Perg. 4:o nr 6 から書き写されたと考えられ、作品を完全な形で伝えている AM179 fol. などによって代表されるグループである。

本稿では、『マントのサガ』のテキストについては、Kalinke, Marianne E. (ed.) *Möttuls saga. With an Edition of Le Lai du Cort Mantel by Philip E. Bennett*. Editiones Arnarnagnæanæ B 30. Copenhagen: Reitzels, 1987 を使用する。以下、本稿本文および注記における本作からの原文の引用はすべてこの版による。この版では『マントのサガ』の原典とされる『短いマントの短詩』 (*Le lai du cort mantel*) のフランス語による原文テキストも、『マントのサガ』のアイスランド語テキストと対の形で掲載されている。

なお、この Kalinke の版における『マントのサガ』のアイスランド語テキストの掲載ページでは、『マントのサガ』を伝える18点の写本のうち、2点あるいは3点の本文が、それぞれ2段あるいは3段パラレルで掲載されている。本稿では、『マントのサガ』の原文を引用する際には、最上段に記されている本文から引用し、同じページの他の段に記された他写本の内容については、特に必要と思われる場合のみ記すことにする。最上段に記されている本文は、基本的には、本作の内容を完全な形で伝えている紙写本 AM179 fol. (17世紀のものとしてされる) の内容に基づきながらも、それぞれ1400年頃のものとしてされる2点の羊皮紙断片 AM598 I a 4to (一様のみ現存) と Stockholm, Perg. 4:o nr 6 (二葉のみ現存) で伝えられる部分については、これらの羊皮紙断片の内容が採用された形で構成されている。具体的には、本文の始まりから第六章の20行目 (31頁) の最後から2つ目の単語までは AM179 fol. 写本に基づき、次の20行目の最後の単語から第七章34行目の終わり (39頁) までの部分が AM598 I a 4to 写本に基づく形となり、その次の行からは AM179 fol. 写本の内容に戻るが、第十章13行目 (55頁) の2つ目の単語から作品の終わりまでは、Stockholm, Perg. 4:o nr 6 写本に基づく形となっている。

以下、本稿の本文中で『マントのサガ』の内容を問題にする際や、原文の引用箇所にした頁数は、本稿で使用している Kalinke の版における該当箇所頁数である。

- 2) Kalinke, Marianne E. (1979) Amplification in *Möttuls saga*: Its Function and Form. *Acta Philologica Scandinavica* 32, pp. 239–55. および Kalinke, Marianne

『マントのリームル』における、アーサー王と臣下の騎士達との関係をめぐって

- E. (ed.) *Mottuls saga* (前掲書, 註1), pp. LXIV-LXXI を参照。
- 3) いわゆるアーサー王にあたる人物の名前の原語での表記は、時代や言語圏によって細かく異なるが、本稿ではアーサー王にあたる人物の名の日本語表記に関しては、作品の原文からの引用箇所にした訳文を除き、原語にかかわらず、「アーサー」との表記に統一する。
 - 4) テキストは Finnur Jónsson (ed.) *Skikkjurímur*. In: *Rímnasafn*. Samling af de ældste islandske Rimer 2. Samfund til udgivelse af gammel nordisk litteratur 35, pp. 326-56. Copenhagen: S.L. Møllers og J. Jørgensen & Co.s bogtrykkerier, 1913-22 を使用。以下、本稿本文および注記における本作からの原文の引用はすべてこの版による。
 - 5) 以下、本稿の本文中で『マントのリームル』の内容を問題にする際や、原文の引用箇所では、当該箇所を含む ríma 番号 (I, II, III), スタンザ番号, 使用テキストである Finnur Jónsson の版 (註4 参照) におけるページ番号を記載する。
 - 6) Andrés Björnsson (1947) Um *Skikkjurímur*. *Skírnir* 121: 171-81. 以下、Andrés Björnsson (1947) とする。
 - 7) Kalinke, Marianne E. (1981) *King Arthur, North-by-Northwest. The matière de Bretagne in old Norse-Icelandic romances*, Bibliotheca Arnarnagæana 37. Copenhagen: C. A. Reitzels Boghandel. 以下、Kalinke (1981) とする。
 - 8) Kalinke, Marianne E. (ed.) *Mottuls saga* (前掲書, 註1), LXXVI-LXXXI.
 - 9) Driscoll, M. J. (1991) The Cloak of Fidelity: *Skikkjurímur*, a Late Medieval Icelandic Version of Le Mantel mautaillié. *Arthurian Yearbook* 1, pp. 107-33. 以下、Driscoll (1991) とする。
 - 10) Larrington, Carolyne (2011) The translated *lais*. In: Marianne E. Kalinke (ed.) *The Arthur of the North. The Arthurian Legend in the Norse and Rus' Realms*, Arthurian Literature in the Middle Ages, 5, pp. 77-97. Cardiff: University of Wales Press. 以下、Larrington (2011) とする。
 - 11) ここでの引用中の ref という形は対格形で、主格形は refr.
 - 12) Vésteinn Ólason も本作のこの箇所で用いられた「狐 (refr)」という語に関して、同様の解釈を示しており (“Refjar”. *Davíðsdiktur sendur Davíð Erlingssyni fimmtugum* 23. ágúst 1986. Reykjavík, 56-58), Finnur Jónsson は、「狐を入れる (stinga ref)」という表現の意味するところについて、はっきりと「男性器」への言及はしていないものの、この「狐を入れる」という表現は、本作のこの箇所の他には見られず、わいせつな意味をあらわすものであると述べている (Finnur Jónsson (1926-28) *Ordbog til de af Samfund til udg. af gml. nord.*

- litteratur udgivne rímur samt til de af dr. O. Jiriczek udgivne Bósarimur.* København : Trykt hos J. Ørgensen & Co. (以下、Finnur Jónsson (1926-28) とする), p. 296)。一方、Driscoll (1991: 115) は、ここでの「狐」を王妃自身、すなわち「雌狐、二心ある者」(the vixen, the treacherous one) と解釈している。
- 13) 「陰部」と訳したのは引用中の *klettis bein*。この語句は「女陰」をあらわすケニングとされ、Driscoll (1991: 114-5), Larrington (2011: 91) とともにそのように解釈している。
- 14) この「ガチョウの場所 (*gásar stað*)」という語句は、Finnur Jónsson (1926-8: 125), Driscoll (1991: 114) では、「女陰」をあらわすものと解釈されている。
- 15) もっとも、サガでもアーサー王宮廷の騎士イーデウス (Jdeus) の恋人がマントの試着をした折、マントの前側はちょうど良い長さになったものの、後ろ側は腰まで届かず、ほとんど帯も隠れないほどに短くなり (53頁)、それを受けたキャイイの発言の中に、*og mego vær þo ath sonno aller sia ad e 'igi er vnnasta þin þar vel huld er lenndar hennar erv berar*。「しかし、我々はみな、あなた様の恋人の腰が露わになっているところでは、彼女の体がうまく覆われてはいないことがわかりますな」(53頁) と、彼女の腰ないしは下半身の後部にまでマントの丈が及ばない形になったのを指摘をする程度の記述はあるが、具体的に性器に言及したものと解釈できる表現は、サガには見られない。なお、本稿で使用の *Kalinke* の版のこの箇所では、2つの写本に基づく本文が2段パラレルで記載されており、上段の本文は AM179 fol. 写本のもので、下段には Stockholm, Perg. 4:o nr 6 写本の本文が掲載されている。Stockholm, Perg. 4:o nr 6 写本の方では、この部分は、*meigum vier nu aller siä / ad ey er unnusta þijn vel huld þar dausenn er ber*「我々はみな、あなた様の恋人は、臀部が露わになっているところでは、体がうまく覆われてはいないことがわかりますな (53頁)」と記されている。
- 16) 註1を参照。
- 17) I は *ríma* 番号。なお、本稿の本文において、『マントのリームル』の内容を問題にする際に記したスタンザ番号や頁数は、本稿で使用している Finnur Jónsson の版のもの (註4参照)。以下同様。
- 18) *Óðins kvón* はケニングで、「地面」をあらわす (Finnur Jónsson 1926-28: 225)。
- 19) 註5参照。
- 20) *fallða Rist* はケニングで、「女性」をあらわす (Finnur Jónsson 1926-28: 302)。
- 21) ここで引用した箇所の本文は Stockholm, Perg. 4:o nr 6 に基づいている。な

『マントのルーム』における、アーサー王と臣下の騎士達との関係をめぐって

お、この部分については、使用テキストには引用した本文とパラレルの形で17世紀後半のものとする紙写本AM588i 4toの本文も記されており、AM588i 4to写本の本文では、Enn kongur og hird hanns settist til bords / var þá margur göður riddare angradur / saker sinnar vnnustu. Art (us) kongur veýtti hird sinni / so ey hefur þuylyk veitsla verid veýtt nie þeiginn「アーサー王は騎士達ともども食卓に着いた。多くの立派な騎士達は恋人達のことでは悲しんでいたが、アーサー王は宮廷人達に対し、類例のないほどの宴を催した(67・69頁)」と記されている。

- 22) Kalinke, Marianne E. (1973) Honor: The Motivating Principle of the *Erex saga*. *Scandinavian Studies* 45, pp. 135-43.
- 23) Kalinke, Marianne E. (1975) Characterization in *Erex saga* and *Ívens saga*. *Modern Language Studies* 5, pp. 11-19.
- 24) Kalinke, Marianne E. (1977) *Erex saga* and *Ívens saga*: Medieval Approaches to Translation. *Arkiv för nordisk filologi* 92, p. 125-44.
- 25) Kretschmer, Bernd (1982) *Höfische und altwestnordische Erzähltradition in den Riddarasögur*. Studien zur Rezeption der altfranzösischen Artusepik am Beispiel der *Erex saga*, *Ívens saga* und *Parcevals saga*. Wissenschaftliche Reihe, 4. Hattingen: Verlag Dr. Bernd Kretschmer.
- 26) 詳しくは Lurkhur, Karen Anouschka (2008) *Redefining gender through the arena of the male body: The reception of Thomas's Tristan in the Old French Le Chevalier de la Charette and the Old Icelandic Saga of Tristram ok Ísodd*, unpublished Ph. D. thesis, University of Illinois, Urbana, pp. 210-211や、Kalinke, Marianne E. (2008) Female desire and the quest in the Icelandic legend of Tristram and Ísodd. In: Norris, J. Lacy (ed.) *The Grail, the quest and the world of Arthur*, pp. 76-91. Cambridge: D. S. Brewer, pp. 87-90. 拙稿(2019)『『トリストラムとイーソッドのサガ』をめぐって』(拙訳書『北欧のトリスタン物語』麻生出版, 2019年, 所収)を参照。いわゆるトリスタン物語では、主人公のトリスタンが伯父王の妃となる女性を獲得して国に帰る途上、トリスタンと女性と一緒に媚薬を飲んだために相思相愛となり、帰国後、女性はトリスタンの伯父王の妃となるも、王妃となった女性とトリスタンの間の恋愛関係はいわゆる不倫の形で続き、彼ら2人と伯父王の関係が悪化する、という経過が語られているが、14世紀半ばないしは1400年頃にアイスランドで独自に著されたとされる『トリストラムとイーソッドのサガ』と呼ばれる作品では、古典的なトリスタン物語の内容を踏襲する『トリストラムとイーセンドのサガ (*Tristrams saga ok Ísondar*)』と呼ばれる作品と比べ、主人

公トリストラムとモウロッド王（トリストラムの伯父王）のいずれについても、その言動は、特にイーソッドをめぐって、より相手の望むところを叶いやすくするものになっており、互いの関係がより悪化しないよう、より良好な状態に保たれる形に描かれている。なお、『トリストラムとイーセンドのサガ』においてトリストラムの伯父王の妃となる女性の名は、本稿で使用している Eugen Kölbing の版（下記参考文献表を参照）では Ísönd と記されており、上記の作品タイトル中に Ísöndar とあるのは、Ísönd という名の属格形である。この Ísönd という名は日本語表記では「イーソンド」となるが、研究論文などでは Ísónd（日本語表記では「イーセンド」）と記されることが多く、本稿での日本語表記では「イーセンド」とした。

- 27) フランス語などの外国語による騎士文学が主としてノルウェー語への翻案を経てアイスランド語へと翻案された作品と、こうした翻案物の作品から個々のモチーフを借用し、アイスランドで独自に練り上げられた物語を扱った作品の両方が含まれる。
- 28) 基本的に870年のアイスランド植民よりも前の段階に物語（史実ではない）の時代設定がなされたもの。

主要参考文献（註で挙げたものは除く）

一次資料

- Blaisdell, Foster W. (ed.) *Ívens saga*. Ed. Arnarn., Ser. B, vol. 18. Copenhagen: C. A. Reitzels Boghandel, 1979.
- Blaisdell, Foster W. (ed.) *Erex saga Artuskappa*. Editiones Arnarnagnæanæ, B, 19. Copenhagen: Munksgaard, 1965.
- Tristrams saga ok Ísöndar*. Mit einer literarhistorischen Einleitung, deutscher Übersetzung und Anmerkungen zum ersten Mal herausgegeben von Eugen Kölbing. Die nordische und die englische Version der Tristan-Sage. Herausgegeben von Eugen Kölbing. Erster Theil. Heilbronn: Verlag von Gebr. Henninger, 1878; Reprint. Hildesheim: Georg Olms Verlag, 1978.
- Saga af Tristram ok Ísönd*, i Grundtexten med Oversættelse af Gisli Brynjúlfsson. *Annaler for Nordisk Oldkyndighed og Historie* 1851: 3-160.

二次資料

- Barnes, Geraldine (1975) *The Riddarasögur and Medieval European Literature*. *Mediaeval Scandinavia* 8: 140-58.

- Barnes, Geraldine (1989) Some Current Issues in riddarasögur Research. *Arkiv för nordisk filologi* 104: 73–88.
- Barnes, Geraldine (2000) Romance in Iceland. In Margaret Clunies Ross (ed.) *Old Icelandic Literature and Society*, 266–86. Cambridge: Cambridge University Press.
- Björn K. Þórólfsson (1934) *Rímur fyrir* 1600. Safn Fræðafjelagsins um Ísland og Íslendinga 10. Copenhagen.
- Blaisdell, Foster B. (1996) *Möttuls saga*. In Norris Lacy (ed.) *The New Arthurian Encyclopedia*. Updated Paperback Edition, 331–2. New York/London: Garland Publishing, Inc.
- Bruckner, Matilda Tomaryn and Burgess, Glyn. (2006) Arthur in the Narrative Lay. In: Glyn Burgess and Karen. Pratt (eds.) *The Arthur of the French*, 186–214. Cardiff: University of Wales Press.
- Driscoll, M. J. (1997) “Words, words, words”: Textual Variation in *Skikkjurímur*. *Skáldskaparmál* 4: 227–37.
- Finnur Sigmundsson (1966) *Rímnatal*. Reykjavík: Rímnafélagið.
- Hagland, Jan Ragnar (1985) Du probleme de l’expansion de texte dans la *Möttuls saga* par rapport a l’original français. In: Régis Boyer (ed.) *Les sagas de chevaliers (riddarasögur)*. Actes de la Ve conférence Internationale sur les Sagas (Toulon. Juillet 1982), 249–63. Paris: Presses de l’ Université de Paris-Sorbonne.
- Halvorsen, Eyvind Fjeld (1967) *Möttuls saga*. In: *Kulturhistorisk leksikon for nordisk middelalder fra vikingetid til reformationstid* 12, cols. 189–90. København (Copenhagen): Rosenkilde og Bagger.
- Kalinke, Marianne (1996a) Chastity Tests. In Norris Lacy (ed.) *The New Arthurian Encyclopedia*. Updated Paperback Edition, 81–83. New York/London: Garland Publishing, Inc.
- Kalinke, Marianne (1996b) *Skikkju rímur*. In Norris Lacy (ed.) *The New Arthurian Encyclopedia*. Updated Paperback Edition, 423. New York/London: Garland Publishing, Inc.
- Kelly, Kathleen Coyne (2000) *Performing Virginity and Testing Chastity in the Middle Ages*. London/New York: Routledge.
- Larrington, Carolyne (2009) Queens and Bodies: the translated Arthurian *lais* and Hákon IV’s Kinswomen. *Journal of English and Germanic Philology* 108: 506–27.
- Leach, Henry Goddard (1966) The *Lais bretons* in Norway. In: Mieczysław

- Brahmer, Stanislaw Helsztynski and Julian Krzyzanowski (eds.) *Studies in Language and Literature in Honour of Margaret Schlauch*, 203-12. Walsaw: PWN-Polish Scientific Publishers.
- McCracken, Peggy (1998) *The Romance of Adultery. Queenship and Sexual Transgression in Old French Literature*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Reichert, Hermann (1986) *King Arthur's Round Table: Sociological Implications of Its Literary Reception in Scandinavia*. In: John Lindow, Lars Lönnroth, and Gerd Wolfgang Weber (eds.) *Structure and Meaning in Old Norse Literature: New Approaches to Textual Analysis and Literary Criticism*. The Viking Collection: Studies in Northern Civilization 3, 394-414. Odense: Odense University Press.
- Sverrir Tómasson (2012) *The Function of Rímur in Iceland during the Late Middle Ages*. In: Jürg Glauser (Hg.) *Balladen-Stimmen. Vokalität als theoretisches und historisches Phänomen*. Beiträge zur Nordischen Philologie 40, 59-74. Tübingen und Basel: A Francke Verlag.
- Vésteinn Ólason (1982) *The Traditional Ballads of Iceland: Historical Studies*. Reykjavík: Stofnun Árna Magnússonar.